

vol.7

選書者：守本陽一

(一般社団法人ケアと暮らしの編集社)

●『ケアとはなにか 看護・福祉で大事なこと』 著者：村上靖彦

近年注目を集める「ケア」という単語。その単語にはどのような意味が込められているのか。現象学者である村上靖彦氏が、現場の医療福祉専門職や当事者の声を拾い上げて、綴った「ケア」を考える人のための最初の一冊です。共にいること、声をかけること、居るをささえること、さまざまなケアの形を考えることができます。

●『社会的処方：孤立という病を地域のつながりで治す方法』

著者：西 智弘

薬ではなく、つながりを処方するという社会的処方の考え方。困難の根本的な原因は、つながりの不足、孤独孤立にあるのではないかと多様な患者さんを見ていて感じます。社会的処方が進む英国の事例や日本での先駆的な取り組みがのっている本です。あなたの活動ももしかすると社会的処方になっているかもしれません。

●『ケアとまちづくり、ときどきアート』 著者：西智弘、守本陽一、藤岡聡子

医療福祉専門職がまちに出ていくための How to を書いた一冊。つながる場、遊びの場、ケアしされる場。多様な場を作るために専門知識も一定必要です。そんな中で専門職にまちにでてもらう。地域を知る方法や医療福祉の先駆的な取り組みが載っているこの本は、医療福祉専門職以外が読んでも十分に楽しい。さて、あなたも書を持って街に出よう。

●『あそびの生まれる場所 —「お客様時代」の公共マネジメント』 著者：西川正

ケアの入り口はあそびの場ではないかと思っています。楽しい、面白いという感情とその行動は、信頼関係があるからこそ生まれるもの。その信頼関係は困難なときに、相互に気かけあい、支え合う入り口になっているはずです。そういったあそびが生まれる場をどう作れるのか、あそびの達人、西川正さんが書かれた本です。

●『社会という荒野を生きる』 著者：宮台真司

社会学の視点から、さまざまな分野を切る宮台真司さん。困難な社会を生きるために必要なものを多様な切り口から語っています。社会という荒野を仲間を生きる重要性を語っています。